The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	国際バカロレアにおける言語の指導 : すべての教師は言語の教師である
Author(s)	大迫, 弘和; 小澤, 伊久美
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2018, 14, p. 15-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/72146
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

≪対談録≫

国際バカロレアにおける言語の指導
－ すべての教師は言語の教師である －

大迫 弘和（武蔵野大学・都留文科大学・Chiyoda International School Tokyo）
hosako@musashino-u.ac.jp
小澤 伊久美（国際基督教大学）
ozawa@icu.ac.jp

Interview: Teaching Language in the International Baccalaureate Programme
All Teachers Are Language Teachers

Hirokazu Osako interviewed by Ikumi Ozawa

要　旨

国際バカロレア（The International Baccalaureate, IB）では、「すべての教師は言語の教師である」という考えが基本にある。それは、科目ごとに担当教員が異なるDiploma Programme（DP）においても同様で、Languageの教科を担当しない教員もそうした意識を持つ。教員がその意識を形成する上で、Theory of Knowledge（TOK）を教えることが決定的な役割を果たす。また、IB教員の教師教育は、教えながら学ぶこと、さまざまなワークショップ、学校や地域を越えたグローバルなネットワークの存在などに支えられている。日本の学校教員にとってはグローバルなネットワークを活用する上で言語力が障壁となっているため、文部科学省はコンソーシアムを立ち上げ、日本国内で学校を越え都道府県を越えて連携をとる仕組みづくりを考えている。IBの教育には、IBを教えない者にとっても活かせるところが大いにある。

Abstract

The International Baccalaureate (IB) Programme holds as its fundamental concept that "All teachers are language teachers." That is true, too, in the Diploma Programme (DP), where educators teach different subjects. All teachers including those who teach subjects other than language have the same consciousness. To develop the awareness as being the language teachers, Theory of Knowledge (TOK) plays a decisive role. In

addition, IB educator's professional development is supported in various ways such as learning in practice, various workshops, and the global network of IB teachers transcending schools and districts. Since the language proficiency works as hindrances for Japanese school teachers to utilize the network, the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) plans to form a consortium so that educators can cooperate beyond schools and districts within Japan. IB is of great use for those who do not teach IB programme, too.

キーワード：すべての教師は言語の教師、探究、TOK、教師教育

「すべての教師は言語の教師である」という考えはIBの基本

小澤 MHB年次大会ではご講演をありがとうございました。本日は、特に国際バカロレアプログラムの「すべての教師は言語の教師である」という考えについて、もう少し教えていただければと思います。よろしくお願いいたします。

大迫 はい。「すべての教師は言語の教師である」、"All teachers are language teachers."というのは、IBにとっては非常に大事な考え方なんです。IBには、PYP (Primary Years Programme)、MYP (Middle Years Programme)、DP (Diploma Programme)、CP (Career-related Programme) という4つのプログラムがありますが、わかりやすくするためにPYPとDPにフォーカスしてお話しますね。PYPは初等教育で、お一人の先生がいろいろな教科を教えているわけですし、初等教育時点の言語形成・獲得ということを考えると、それを担当する先生の重要な仕事の一つに言語をしっかり育てることがあるというのは、日本の学校教育を考えても特に不自然なことではないだろうと思います。しかし、DPでは日本の一条校と同じで、科目別に異なる教員が教えるわけですが、それでもすべての教師に"All teachers are language teachers."という考え方を共通なものとして持ってもらうという点は、IBの大変際立った特徴だと思います。つまり、Languageという教科を担当しない先生方、例えば科学や数学などの先生でさえも、その意識を持つということが、IBにおいてLanguageがどのような位置づけになっているのか、あるいはIBの学びにおいてLanguageが何を担うと期待されているかが見えてくると思うんです。

小澤 IBにおいて、この"All teachers are language teachers."という考え方は比較的新しいものなのでしょうか。

大迫 いえ、考え方としては随分前から明確に出されていたものですね。

小澤 さまざまな教科の先生方が全員このような意識を持って指導に取り組むのは素晴らしいことですが、言語教育がご専門ではない先生がこれを意識し、遂行するには、IB や学校の支援が非常に重要になるのではないでしょうか。

大迫 DP にフォーカスして話すと、決定的な役割を持っているのは Theory of Knowledge（TOK）だと思います。教科の先生方が TOK を通してその教科を見つめるという作業自体、大変な言語の活動です。だから僕は、DP の先生には、TOK を直接担当しない先生でも必ず TOK のワークショップは出てもらいました。もちろん順番にして、何年かかけて全員に出てもらうようにするのだけれども。TOK を知らないで、DP の授業をするというのは、何か本質的なところがキチッと押さえていない状態でやってしまうおそれがあります。それで IB Math をやってしまったら、今までの日本でやってきた数学教育ともしかしたら全然違いが見えないかもしれない。

Theory of Knowledge（TOK）とは

小澤 TOK という教科について簡単にご説明いただけますでしょうか。

大迫 TOK は、CAS (Creativity, Action, Service)、Extended Essay とともに DP の「コア」を構成しています。コアと各教科は、独立していますが、お互いに補完し合う関係にあります。生徒は、TOK の中で、特定の知識体系を身につけるのではなく、Critical Thinking によって、知るプロセスを探究します。

小澤 TOK の指導の手引きに、TOK の教師は「知識に関する主張」（knowledge claim）を分析し、「知識に関する問い」（knowledge question）を探究するよう生徒に働きかけるとありますが、そのことですね。

大迫 そうです。詳しくは指導の手引きを読んでいただくと良いと思いますが、TOK では Areas of Knowledge、「知識の領域」を８つ設定していて、それは、数学、自然科学、ヒューマンサイエンス（人間科学）、芸術、歴史、倫理、宗教的知識の体系、土着の知識の体系の８つなんですが、知識の領域が異なれば、知識の本質が異なり、その知識を得るための方法論も異なると考えるんです。そして、TOK では生徒にそのうち５つか６つの「知識の領域」を探究するように促さなくてはいけないということが決まっていて ― どれを選ぶかは学校が決められるんですが ― それぞれの領域の中で、知というものはどのように認識されていくかということをやるわけです。それを通じて、その知識を得るためのさまざまな方法

が―TOK では具体的には、言語、知覚、感情、理性、想像、信仰、直観、記憶の８つがあると設定しているのですが―どのように機能するか、どのように相互作用するのかを探究します。

TOK を教えることと「言語」の指導

小澤 その TOK を教えることが、「言語」を教えるということを教師が意識することにつながるということなのですね。

大迫 そうです。例えば、これは実際の TOK のテーマではないけれども、数学というものが存在しなかったら世界のありようは変わるのか変わらないのか、といったテーマについて、言語を使って探究していくわけです。そこが先ほどご質問のあった、言語以外の教員がどうやって「言語を教える者」としての認識を持つかという具体的な作業になるのではないかと思うんです。

小澤 TOK は、どなたが担当するのですか。

大迫 この教科の担当の仕方は大きく分けると二つあって、一つは TOK の先生一人が２年間 100 時間を全部担当するという形。もう一つは 100 時間を複数の先生が分担する形です。例えば、歴史の分野は社会科の先生、数学の分野は数学科の先生といった形で、４～５人の先生が一人 15 時間から 20 時間ずつ担当します。このように数名で分担する場合、コーディネーターがそれぞれの内容を把握するようにして、子どもたちにとっての 100 時間がきちんと組み立てられているように、つまり、同じようなものになっていないか、全然つながりが無かったりしないかを見るわけです。

小澤 どちらの形で教えられることが多い、ということがありますか。

大迫 私が見ているところでは後者の方が多いですね。というのは、正直言って一人で TOK を担当できる教師がなかなかいないからです。僕が以前校長を務めていた学校は、アメリカの大学の哲学科で博士号を取った先生がたまたまいらっしゃったので、哲学的な内容で随分子どもたちを、「考える」ということに導いてくれたんですが、それは僕の今までのキャリアの中でも非常に例外的でした。それ以外のケースは全部分担。そうすると、例えば学校の中に DP で数学を教える先生が３人いるとして、TOK の分担教員にそのうちの一人がピックアップされた場合、その教員は TOK のワークショップに行かなくてはならない。じゃあ、それ以外の二人の先生は直接は TOK の授業を教えないから、TOK のワークショップに別に行かなくてもいいように思うかもしれないけど、僕は「その二人も行かなく

ちゃならない」と強く推奨しています。

小澤 ワークショップ以外で教師が学べる機会もありますか。

大迫 教室で先生方が力をつけていく、ということもあります。例えば、PYP には Unit of Inquiry、探究の単元という教科融合型の一番中心となるものがあるんだけれど、これをどう教えるかは実際に教える中で、教えながらわかってくる、ということがよく言われています。教えて１年目、２年目、３年目に入った先生が、段々に「Inquiry Based Learning、探究の学びっていうのはこういうことをするのか、子どもたちはこういうような形で学びを深めていくのか、そのためには教師である自分がこういう質問をすればいいんだ」っていうのが、じわじわとわかってくる。「ああこういうことをやればいいんだ」と実感するっていうことですが、このことは一人の方の経験談としてではなく、また、日本人の先生とか外国人の先生とかに関係なく、本当によく耳にします。今 PYP のことを話しましたが、DP も同じだと思うんです。TOK を担当しても、今までそういう経験がない数学の先生は、最初は多分あまり TOK の影響を受けないかもしれない。TOK は TOK、自分は数学を勉強してきたから数学の先生だっていう意識が強い。でも、教えていくうちに段々 TOK と数学がなんとなくつながっていく、数学の教師でもあるけど言語の教師でもあるってわかってくるという、そういうところがあるんじゃないかなと思います。

IB の教師教育

小澤 ワークショップの話に戻りますが、IB 校は、教員を国際バカロレア機構の公式ワークショップに参加させなくてはならないというお話でしたね。

大迫 国際バカロレア機構が参加を義務付けているものがあるので、それについては IB 校としては教員を出さなくてはいけないというルールがあります。IB のプログラムも日本の学習指導要領と同じように何年に１回という形で改訂が行われるので、改訂の度に必ず受けなくてはいけません。IB のワークショップには、学校外で開催される Face to Face のワークショップ、オンラインのワークショップ、そして学校内で開催するインスクールのワークショップがあるんですが、僕は Face to Face に参加させる以外に校内ワークショップというものを積極的に実施します。

小澤 校内ワークショップの良いところはどんな点でしょうか。

大迫 例えば PYP だと小学校の先生全員をワークショップに送るとすると学校の側の金銭的な負担が非常に大きいわけです。それに対して、ワークショップリーダー

一人に学校に来ていただいて校内ワークショップを行う場合、費用面だけでもメリットがありますし、ホームで勉強できることは先生方にとっても良く、校内でやったワークショップについて悪い結果を聞いたことがないですね。研修というと、外に行って学ぶということがパッと思い浮かぶけれど、外で開催されるワークショップだと、いろいろな学校の先生がいて、それぞれの学校は預かっている子どもが違うから、学校の課題としても異なるものが出てきます。それはそれで勉強にはなるけれども、校内ワークショップは、その学校の先生方が日々悩んでいるものに集中できて本当にその学校用の学びになっていくんです。一方で僕はオンラインのワークショップはあまり積極的には勧めません。労多くして得るもの少なし、という感じがします。ただ、これだけ世界中でIBをやるようになって、みなで共有していくのに有効な手段だとは思います。

小澤 Inquiry Based Learning では、教師がどのように質問を投げかけるかということが、難しいけれどもとても重要なことだと思います。その意味では授業について先生方が一緒に話し合う場があると、「そういう質問いいね」などという気づきにつながって良いと思ったのですが、DP の場合は、科目ごとに教員が集まって話すような機会はあるのでしょうか。

大迫 それは学校を越えてインターネット上のネットワークでつながっているので、それを活用している先生は少なくないです。例えば「TOK のここの部分については？」と質問をすると、それに対するコメントが次々入ります。成功例だけでなく、実践例、それに、僕はここで失敗したということを書く人も結構いる。これがとても役に立つ。そんなふうに、グローバルな中での意見交換というのは、頻繁に行われていて、そういうのは英語ですが、日本の IB 候補校になっている学校の中では先生方が英語で意見交換できるような状態ではないから、それが活用できない学校があるという問題があります。そうすると日本の中で作らなきゃいけないのかなっていう話が出ています。文部科学省では2018年度にコンソーシアムを立ち上げて、学校を越えて、都道府県を越えて連携をとって、少しでも良い授業をするために支え合いましょうというプロジェクトがあります。

IBが日本の教育にもたらす影響

小澤 TOK に関する書籍を何冊か読んだのですが、私は本務校の国際基督教大学がリベラルアーツ教育を特徴としていることもあって、知の領域という考え方や、領域ごとに知の形成のされ方が違うといったことが非常に理路整然と書いてあるの

に感心しました。あのような考え方を知って大学に入れる学生は素晴らしいな、恵まれているなと思いました。もしかすると、大学教授の側が専門の中にどっぷりとつかってしまっていて、自分の知の基盤がどこにあるのか疑ってみる機会がないということがあるかもしれませんね。

大迫 子どもたちの方が Critical Thinking によって、いろいろな判断をしながら先生の指導に従っていくということもできるのではないかなと思います。

小澤 日本の学習指導要領の中でも数学的思考や態度を身に付けることがうたわれていますが、それと TOK のように、数学的な知識の基盤は何によって成り立つのかを疑うところから始まるというのとは本当に大きく異なりますね。

大迫 そうですね。それがまさに IB、TOK 的なところだと思います。

小澤 日本の学校に入った時に、そこが伝わるかどうかが重要だと思いました。IB 校で教えている先生方はワークショップがあり、先生方同士の学び合いもあるわけですが、IB 校で教えていない者がそれを学ぶのは難しいですね。

大迫 今のご質問は、日本に 200 校の IB 校を、というプロジェクトの意味に関わっていると思います。まず、一つは 200 校という学校で DP を実施して、そこで教える先生としての研修とかトレーニングを受けてもらうということがあります。もう一つは、各都道府県に 1 校は拠点校的に IB を現実的に実施している学校ができることになれば、その学校の先生方とのやり取りの中で、地域のそれ以外の学校の先生方も新学習指導要領のキーワードである主体的で対話的な深い学びというものを実施するヒントなりノウハウなりやる気なり可能性なりを学ぶということがあります。そのような仕組みがないと、また、ゆとり教育を導入した 20 年前の学習指導要領の改訂の時のように、「なんとなく良いなあ」と思っていても具体的な指導の仕方がわからず、どうしたら良いかわからないから形式だけで終わってしまう。今回は、「しっかりと参考になるものを各都道府県の中に置こう」という構想で、200 校の使命ははっきりとしているから、前回とは随分と違っていると思うんです。

小澤 その辺りがまだまだ誤解されている感じがありますね。例えば、「片田舎に IB 校ができてもそこに入って海外を目指すような意識を持っている子はいない、そういう子を相手にIBやる意味はあるのか」という声を耳にします。

大迫 意味はありますよ。僕は地方都市に行って教育委員会で話すことが多いんですが、そういう町で、その地域を将来引っ張っていく、そういう役割を将来的に担う子どもたちが、ナショナルのカリキュラムで勉強するのか、グローバルスタンダード

で勉強するのかっていうのは、きっと地域になんらかの違いが出るっていう、そういうことをみなさん思っていらっしゃいます。もちろん、県のどこかから一人、IBを勉強して世界を舞台に活躍する人というのは出るかもしれないけど、あまりみなさんそういうことは考えていらっしゃらない。地域の子どもたちのことも本当に大事にしていて、その子たちに本当に必要な勉強をさせてあげたいという思いがある。でもそれは決して海外の大学に行くためということではなく、最後に地元に戻ってきて、それこそ地元を引っ張って行く人になっていってほしいと考えていることの方が多いと思う。ただ、どの地域にもIBに興味を持つ子はいます。中学３年生にも、今度この高校でIBがあるとしたらやってみたい、面白そうだって言う子が。20人ないし多くても40人くらいの人数は、どの県でも、そういう勉強してみたいなって思う子がいる。それは、すごくいいことだと思いますね。

移動して学ぶ子どもへの「言語」の指導

小澤　子どもたちが世界各国を移動して学んでいく時に、IB のようなグローバルスタンダードのプログラムがあるのは強みだと思う一方で、出入りが激しくて、特に Language の教科の中で、言葉「を」勉強する時にかなり苦しいという話を聞きます。言語を通じて学ぶ、言語を使って学ぶ、あるいは探究はいいけれども、例えば確実に語彙を増やすというようなことは求めにくいというのですが、いかがお考えでしょうか。

大迫　僕はそれは、ある意味宿命だと思います。移動の世界、ダイバーシティが前提で、それをなんとか切り盛りしていくというのがインターナショナルスクールだから発想を変えないと。例えばすぐ、学力別にしないと効果的じゃないんじゃないかといった考え方が出ますが、根本の発想を変えないと。IB ではない学校だと ― インターナショナルスクールだけではなく、いわゆる欧米系の学校に ― よくあるのですが、飛び級させたり、ある教科だけ先に行かせてあげるといった学びのスタイル、それは IB では成立しない。なぜかというと DP は DP で全員一緒にやるわけで、IB 校の中では「飛び級」という発想自体が成立しないから。まさに collaborated、協働でやるという意味で、ある科目がとても得意な子も、あまり上手くいかない子も一緒になっていく。IB 校でも飛び級は、やろうと思えば小学校の段階でできるかもしれないけれども、でも最後の DP 段階で一緒にするしかないから、「だったら最初から同じように一緒にみなでやる方がいいんじゃないか」という話になる。そういう「得意だから飛び級させてください」ということが IB

の中では存在しないのと同じで、逆のバージョンで子どもの言語だっていろいろな状態があるわけです。それをレベル別に分けていかないと上手くいかないというような発想でやっていくと、もう先生が倒れてしまう。正直言って、仮に20人を３つのクラスに分けたとしても、その１クラスの中にまた違いがある。だから、ある意味ではそういうカオス的な状況は前提で、その中でできる勉強をやるというのがインターナショナルスクールで、いわゆる画一的な形でこうしなくてはいけない、分けなくてはいけないといった発想からは解放されないと教えることができないんじゃないでしょうか。

小澤 collaborative に学ぶけれども、differentiation をして、個別の対応は先生がしていく。

大迫 うん。それを前提にプランを立て、上手く、バランスをとりながら子どもたちにとって最良の方法を見つけていくという。

小澤 そのせいでしょうか、インターナショナルスクールは Learning Support Team がしっかりしている学校が多くて羨ましいなと感じます。

大迫 それはそうかもしれない。規模にもよるかなあというのも、ありますが。

「言語」の指導に関わる者が IB から得られる気づき

大迫 IB プログラムが持っているいろいろな要素というのは、言語に関してもそうだし、僕なんかは「教育とは何か」という原点を、常に、IB のことに入っていくと、そこにいつも気づかされます。IB を切り口として、とても重要なことに導かれているというのは度々経験していて、それはそれぞれの領域でも、何かきっと ― 適切な日本語かはわからないけど ― 使えるものがいっぱいある。欧米が中心なんだけれども、非常に 20 世紀の知性といったものが凝縮されているプログラムなのは間違いないし、1968 年にできてもうすぐ 50 周年の中で、一生懸命やられてきた先生方の考え方とか思いというのが入っているから、実際にいろいろなシチュエーションでいろいろな使命を持って子どもさんたちに当たってらっしゃる方の、何かヒントになるものが絶対あるような気がしますね。教室で実際に見て、「こんなの今まで見たことなかったな、私の教室でもあのアプローチは使えるかもしれない」とか。ただ、日本語にしていかなきゃいけないということがある。活かせることがあるのはわかっているのだけれども、英語だとみなさんつかめないから。

小澤 そこで先ほどのコンソーシアムが立ち上がるわけですね。

大迫 そうです。それと、IB を知るのには DP が１番いいものだとは思うんだけれども、

もう一つもし勧めるとしたらPYPのUnit of Inquiryですね。あれを勉強すると、IBというものがよくわかる。僕は小学校のことはあまりよくわかってないのですが、僕の妻がPYP教員なのね。だから彼女が家でやっているのを見てると面白そうだなあと思います。それ以外でもPYPのUnit of Inquiry良いなと思うのが、日本の小学校教育がもともと良い質を持っているから、なんとなくスッと入ってくるというわけです。だから、PYPのUnit of Inquiryと向き合うと、「ああIBってこのようなことを考えているんだなあ」ということが、よくわかると思うんですね。

小澤 確かにそうですね。また、コンソーシアムのことも楽しみにしたいと思います。本日はお時間をいただきまして本当にありがとうございました。

《2017年11月2日　武蔵野大学にて》

参考文献

国際バカロレア機構 (2014)「IBプログラムにおける『言語』と『学習』」Retrieved from https://www.ibo.org/globalassets/publications/language-and-learning-in-ib-programmes-jp.pdf

国際バカロレア機構 (2015)「『知の理論』(TOK) 指導の手引き」Retrieved from https://www.ibo.org/contentassets/93f68f8b322141c9b113fb3e3fe11659/tok-guide-jp.pdf

文部科学省「国際バカロレア」http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/index.htm

International Baccalaureate Organization. *Resources for schools in Japan.* http://www.ibo.org/en/about-the-ib/the-ib-by-region/ib-asia-pacific/information-for-schools-in-japan/